

懐疑論的観点から学生と一緒に考える

特別支援教育講座・山下 光

(1) 授業の概要

主に発達障害（LD, ADHD, 自閉症スペクトラム障害を含むさまざまな知的機能の障害）を対象とした心理アセスメント、特に知的機能とその障害の評価についての基礎理論を学ぶ。またアセスメント結果を指導、支援にどのように役立てたらいいかを考えることが、授業の趣旨である。履修を登録した学生は5名であった。

(2) 授業スケジュール

1. アセスメントとは
2. アセスメントの基礎技法
3. 知的機能とその障害Ⅰ
4. 知的機能とその障害Ⅱ
5. 知的機能とその障害の検査
6. 発達検査の概要
7. アカデミック・スキルの評価
8. 観察法
9. 行動分析の基礎
10. 学校アセスメント
11. 支援関係のアセスメント
12. アセスメント結果のまとめ方Ⅰ
13. アセスメント結果のまとめ方Ⅱ
14. アセスメント結果のまとめ方Ⅲ
15. アセスメント結果の報告と活用

(3) 地域社会を核とした教育と研究のつながり

特別支援コーディネーター専修の学生の多くは教育委員会からの内地留学生であり、修了後は地域の学校でリーダーとして活躍することが期待されている。これらの現職教員学生の多くが、留学の主な目的の一つとして発達障害に関する心理アセスメントの実施と解釈に関する知識とスキルの修得をあげている。授業担当者も当初はそのニーズに答える形で授業を提供してきたが、近年の教育現場では心理アセスメントが乱用され、その弊害も指摘されている。また、最近、心理臨床に携わる新しい国家資格である公認心理師が新設され、教育現場における心理テストの実施やデータの使用についても大きな変化が生じる可能性がある。知能検査をはじめとした心理検査は、実際には存在しない仮説構成概念を扱う。心理検査を実施、解釈する上では、何を計ろうと

しているのか、測定の方法は適切か、信頼性はあるか、その結果をどの程度まで普遍化できるのかという、慎重かつ懐疑的な姿勢が必要である

(4) 授業の展開

根拠にもとづいた医療（EBM）という形で医学からはじまったエビデンス重視のムーブメントは、心理学、教育学にも強い影響を与えつつある。最近の教育関係者の中には、エビデンス＝数字＝テストの得点やプロフィールという単純な思考に陥っている者も少なくないが、実際には学力でさえ仮説構成概念にすぎない。知能も学力も明確な定義がないにもかかわらず、それを測定するテストは存在するという矛盾を内包している。そこで、今年度は最初の1, 2回に医療におけるエビデンス、ゴールデンスタンダード、インフォームド・コンセントを取り上げ、それをテーマにディスカッションを行い、問題意識の共有を図った。それ以降も知能検査に関しては、脳の機能との関係や、優生学との関わり、知能と遺伝に関する最近の研究などを内容に含め、関連する書籍や映像作品なども紹介した。当たり前を見直す姿勢を大切に、学生からの疑問を一緒に考えることに努めた。教育におけるエビデンスは、最終的には教育の目的とは何かという根源的な問題につながる。それが、児童・生徒の将来の幸福のためならば、幸福とは何かというさらに根源的な問題が提起された。

(5) 学生の評価

学生の感想文の中には「抽象的な話が多かった」「何を信用していいか分からなくなりました」「それなりに面白かったが、頭がついていかない部分も多かった」「多重知能の話は面白かったが、測定が難しいと現場では使えない」「（議論が）大切なことだとは思った」などの意見があった。

(6) まとめ

アセスメントとは何か、という切り口から、「眼の前の子ども」の事だけでなく、その子どもたちが将来生きていく社会の未来を考えることの重要性を伝えたかった。議論の中から、懐疑論的観点と多様な価値観を身に付けて欲しかったが、必ずしも成功した試みとは言えない。